

はじめに

「歌は世につれ世は歌につれ」とは、実に言い得て妙である。どのような時代であろうと、世の中の動き、変転に合わせて、その時代世相を見事にすくい上げた歌が生まれては消え、消えては生まれている。断るまでもないが、ここで言う歌とはいわゆる流行歌である。

私にも過去に流行したある歌を耳にすると、その時代の一コマが鮮やかに甦ってくることがある。しかも、その時代に戻ったような雰囲気私を覆い、しばらくその世界から抜け出せなくなった経験が何度もある。思わず微笑みが浮かんでくるような暖かく、しつとりとした、ひよつとすると恍惚とした気分浸らせてくれるかもしれない。しかし、歌によつて喚起される時代の一コマが、あるいは一人の人生の一コマが必ずしも甘美な思い出しの世界に誘ってくれるとは限らない。時には怒りが記憶の底から沸々と湧き上がるかもし

れないし、悲しみが切なく襲ってくるかもしれない。

歌とは人間にとって、自分ではしつかりとは掴みきれない、形にならない情感を時として、まことに見事に紡ぎ出してくれるものらしい。そして、強い共感を抱かされた時、かけがえのない歌として、長い年月の中でも心の奥底に消えることなく残っていくもののようにある。

いきなり「歌は世につれ……」などと書き出したのは、私が今から一〇年前の二〇〇〇年に『中国「戯れ歌」ウォッチング』（論創社）という少々軽妙な書名で、現代中国を分析したことに関わる。

前著の冒頭もこの言葉からだだったので、それに合わせようと、ふと「遊び心」が出たというわけである。実はこの「遊び心」、戯れ歌には欠くことのできない要素であり、これなくしては中国の戯れ歌も日本の川柳や狂歌も長い命を保つことはできなかったと考えられる。

そこで中国の「戯れ歌」に入る前に、日本の「川柳」に目を向けてみたいと思う。以下の数句は、二〇〇九年のサラリーマン川柳大賞を受賞した作品の一部である。

しゅうち心　なくした妻は　ポーニヨポニヨ

久しぶり　ハローワークで　同窓会

ぼくの嫁　国産なのに　毒がある

「パパがいい！」　それがいつしか　「パパはいい」

毎年、第一生命保険がおこなっているコンクールに入賞した作品で、引用したのは、順に一位から三位と七位の作品である。

第一位に選ばれた「しゅうち心　なくした妻は……」は、素直に字面を読んでもこの句の面白味はなんとなく理解できると思う。しかし、世相に少々疎い人は「ポーニヨポニヨ」は、はて、何だろうか？ と頭をひねるにちがいない。

まず、この句の面白味を倍加させるには、次のことが理解されていないと、第二位に選ばれた「久しぶり　ハローワークで……」に七〇〇票以上の差をつけることはできなかったと思われる。

・二〇〇八年七月に宮崎駿制作・監督による長編アニメーション映画『崖の上のポニョ』が公開され、大きな話題となった。

・この作品の主題歌のなかで『ポーニョポニョ』という言葉が繰り返し使われていて、主人公ポニョを形容して『まん丸おなかの女の子』という歌詞がある。

・バラエティ番組に出演していた「羞恥心」という人気アイドルグループがあり、グループ結成以前に、この番組に出演していた一人が「羞恥心」を『さじしん』と読み、司会の島田紳助があきれ返って、その場にいた三人を「羞恥心」と名付けた。

以上の知識をもった上で、あらためてこの川柳を読むと、「夫」の、かつては惚れた腫れたで一緒になったであろう「妻」が、羞恥心を忘れ、体型だけは見事に豊かになってしまっている現実の、何とも言いようのない悲哀と諦観がより強烈に浮かんではこないだろうか。ただ、この川柳に好感がもてるのは、「夫」がそんな「妻」を決して嫌ってはいないらしく、なんとなくほほえましく、読む者に共感さえ呼び起こす句になっていることだろう。

第二位の川柳は、おそらく外国人には「ハローワーク」と日本の雇用状況がわかっていないと理解できないと思われる。日本人なら、ここにお世話になろうがなるまいが、ほとんどの人が「ハローワーク」はわかるにちがいない。そして日本が置かれている現在の不況、失業者の増加、雇用不安、給料カットといった状況を重ね合わせれば、この川柳も寂しい笑いの向こうに厳しい現実が横たわっているのがわかる。しかし「同窓会」と結ばれることで、社会の荒波にも揉まれず青春を謳歌した時代があり、皮肉にも「ハローワーク」がそんなお互いの姿を重ね合わせることができた場になったのは確か。とはいえ、久しぶりの邂逅かいこうの後に訪れたであろう、どうにもやるせない、物悲しい空気が流れているのも感じざるを得ない。

次の「ぼくの嫁 国産なのに……」は、本書で読み解こうとしている中国と大いに関係がある。二〇〇八年一月に起きた、中国で製造された輸入冷凍餃子に毒が混入していた事件は、記憶に新しい。それ以前にも基準以上の農薬が含まれていた中国輸入野菜などが問題視されたが、この餃子事件ほどには食の安全性に対する疑念を日本人にもたらしはしなかったと言える。

それだけにこの川柳が自分の「妻」が「国産なのに」それでも「毒がある」という下句が俄然、生きてくる。当然、中国の輸入食品に関わる事件への知識がなければ、この川柳はまったく面白味を失うはずである。ただし、言うまでもないが、ここでの「毒」は本物の毒ではなく、作者である「夫」への対応が厳しく、辛辣であることを言っている。もっとも、家内安全 家庭円満には、恐妻家ほどよいと聞いたような気もするが……。

第七位に挙げられた「パパがいい！」は、外国人にとつてわかりにくい日本語の代表選手として必ず出てくる「は」と「が」の使い分けのおもしろさだろう。

本書で取り上げる中国語の戯れ歌にも、似たような難しさがたびたび現れる。ただしそれは助詞の問題ではなく（中国語には助詞はない）、中国詩に特有の「韻を踏む」とか「同じ発音で文字が異なる」といったときに起こる。もっとも、それが戯れ歌の戯れ歌としての真骨頂なのだが。

このように日本の川柳を読み解いてみると、日本の民衆もなかなかやるではないかと思ってしまう。ただ中国の「戯れ歌」と違って、批判、皮肉、嘲笑、悲哀、あるいは諦観などがあまり辛辣ではない作品が多いように感じる。このあたりには国民性の違いが出て

いるのかもしれない。

もつとも「サラリーマン川柳」なので、作品のほとんどがサラリーマンの目線で綴られていて、より身近なテーマが選ばれやすかったのかもしれない。したがって、かりに「サラリーマン」という枠組みを外したら、おそらくもつと政治や経済、外交といった面にも目が向けられ、政治風刺漫画のように、ずっと厳しい批判や揶揄^{やゆ}、皮肉、諧謔^{かいぎやく}が現れるに違いない。

それでは中国の「戯れ歌」とはいかなるものなのか。

上述した拙著から一部を引用して、ひとまず確認をしておくことにしたい。

日本人が言う「漢詩」は、後漢の時代に四字の字数が定着した。それからさらに遅れること四百年ほど、六朝時代（紀元三〜六世紀頃）には、四字の単調さを補うものとして、五字で表現することに中国人は気づいた。日本人にもなじみ深い漢詩の詩形がこうして定着した。

四字にしる五字にしる、そのリズムは四拍子だと言われる。リズムカルなので思わ

ず口をつけて出てしまう言葉の並びを発見し、定着させたことは、その後の中国文学に大きな影響を与えた。

ここで言う「戯れ歌」とは、中国語で「順口溜」（シユンコウリュウ）と呼ばれるもので、非常に語呂がよい韻文の一種である。

一句の長さが一定しているわけではなく、二字から十数字まであり、句数も一句から数十句まで、さまざまである。とは言っても、さすがは漢詩の国だけあって、五字で四句がもっとも多く、ついで七字で四句の形式である。なんのことはない、いわゆる「五言絶句」「七言絶句」と呼ばれる形式に当てはまる。（中略）

ただし、民衆の言葉は、恐ろしいほど手厳しく、「戯れ」ている対象に向けられた彼らの目が決してごまかされていないことがわかるはずである。辛辣、揶揄、皮肉、嘲笑、さらには侮蔑を含んだ言葉の数々から窺える民衆の冷徹な目は、為政者に恐れを抱かせるのに充分である。（中略）

これから紹介する「戯れ歌」は、誰が言い始めたのか知る人はいないが、庶民の口から口へ渡り、言葉にいつそう磨きがかけられていったものである。実に巧みに彼ら

の本音が言い表されており、掛け値なしの民衆の肉声が聞こえてくる。

この文章を収めた旧著から一〇年が過ぎた。この間、中国は激しいという言葉が陳腐になるほどすさまじい変動、変貌を遂げてきたと言える。

かつて日本も高度成長期という時代を経験してきたが、現在の中国はそのまっただ中にあると言っている。この一〇年間、中国はどのように歩んできたのだろうか。何が変わり、何が変わっていないのだろうか。

日本人には、こうした中国に少なからず関心をもちながら、戸惑いを覚え、「どうもよくわからない」という思いを抱く人がかなり大勢いるのではないだろうか。新聞には中国関連の記事が掲載されない日はないと言っているほどである。それにもかかわらず、それらの記事を通してだけでは明確な中国像が浮かばない場合がある。あるいはそれらの記事を目にしたがために、かえって一人よがりな中国像を結んでしまっている可能性もなきにしもあらずである。また中国像がはつきり見えないために、わかってしまえばどうということもない事柄でも、無用な猜疑心や不信任感、さらには恐れや敵愾心を抱くことにもなり

かねない。

本書は可能な限り、民衆の生活と彼らの感覚に寄りそって、彼らが紡ぎ出した戯れ歌を糸口に中国の現状を探り、中国民衆が何を見て、どう感じているのかをとらえようとするものである。

言い換えるなら、新聞やテレビなど日本のマスコミを通してだけでは見えない、民衆の生の声を、中国の戯れ歌を通して見てみようというわけである。

戯れ歌が謡う現代中国
——「調和社会」への道

目次

第一章

改革開放路線の始まり

改革開放路線の前

20

「文化大革命」と「大鍋飯」／「文化大革命」から「改革開放」へ

いざ改革開放——白猫でも黒猫でもネズミを捕る猫はよい猫だ

26

鄧小平の「白猫黒猫論」／「先富論」Ⅱ「共同富裕論」／「改革開放」の光と影

嗚呼、開放……

36

鄧小平の「真意」／戸惑いと狂騒／「お役人」大いに稼ぐ／「高齢化社会」——鄧小平の誤算／
急激な高齢化と社会保障の遅れ

広がる地域格差

53

北京、広東、深圳、福建そして甘肅、青海／役人への不信と地方の特性／
上海の「二号さん」と重慶の「火鍋」／増え続ける失業者

第二章

江沢民、国家主席に就任

民主化要求運動がもたらした変化

68

「小平」と「小貧」／「小康社会」を目指して／胡耀邦の死と鄧小平への怒り／
天安門事件―趙紫陽の解任／江沢民登場の舞台裏

江沢民共産党総書記誕生

81

口バに囁く江沢民／江沢民政権の船出／「煉鋼」から「董事長」まで／そして「小康」へ／
強制・監視・規制・弾圧……

しわ寄せはいつでも農民へ

96

農民の土への愛憎／あとを断たぬ地方官僚の腐敗／土地を奪われる農民／
「社会的病弊」としての失地農民／行き場を失う「農民工」／声をあげはじめた農民たち

江沢民色を打ち出せ

113

「三講」運動／三つの代表／西部大開発／少数民族問題解決の第三の道

胡锦涛の時代

江規胡随

136

江沢民から胡锦涛へ／鄧力群の異議申立て／「新社会階層」管理の行方

和諧社会を築け

145

「和諧社会」建設の目指すもの／「和諧社会」への民衆の視線／
「和諧」の文字を分解してみると／モラルの低下を笑う

中国を覆うひずみ

160

江沢民体制の負の遺産／「雷鋒」に学ぶ／問われる医師のモラル／入学難／溢れるニセモノ、不良品／社会の劣化／株価に一喜一憂／公共機関の「犯罪」

和諧社会への道のり

官僚の腐敗

204

高級官僚へのまなざし／不正の連鎖／高級官僚になりたい

環境問題

215

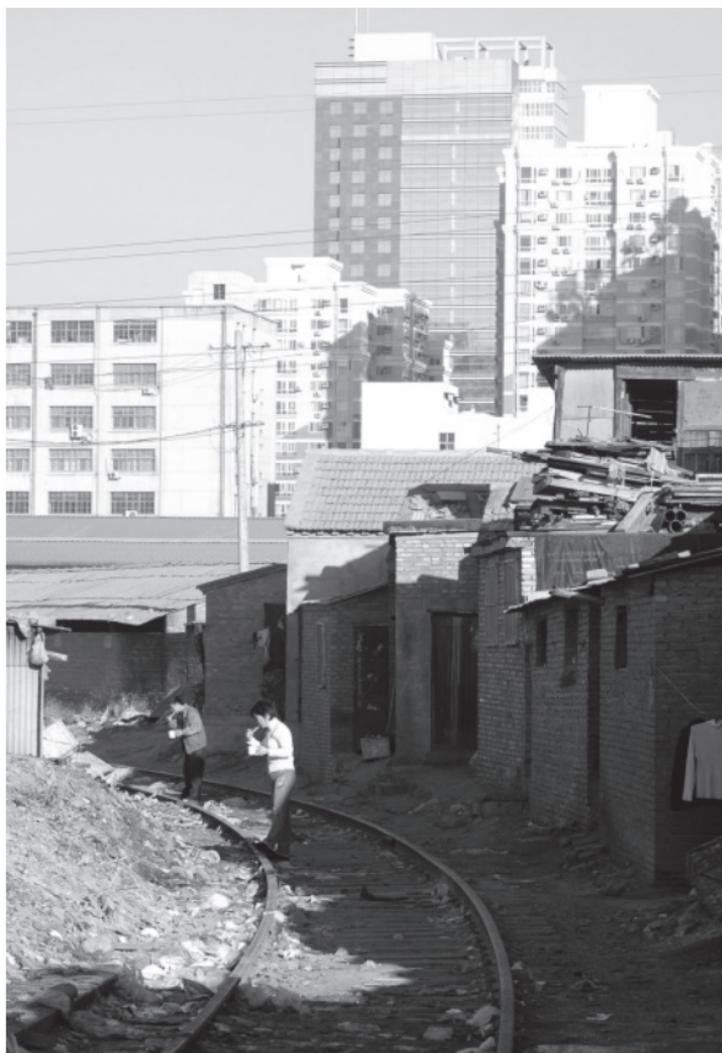
水が危ない／土も空気も、そして文化も／牛乳に震え上がる／「食」の危機的状况



第一章



改革開放路線の始まり



改革開放路線の前

「文化大革命」と「大鍋飯」

二〇〇一年以降の中国の歩みを見る前に、改革開放路線が始まった一九八〇年代の中国の状況をまず確認しておきたい。おそらく現在との違いがより鮮明に浮き上がってくるのではないかと思う。

ただそれに先だって、さらにその前、つまり改革開放以前について簡単に触れておくことにする。

ここで言う改革開放以前とは、「文化大革命」（一九六六～七六年）中の中国である。今から三十余年前の一九七六年に収束した文化大革命は、個人財産を認めない「人民公社」組織が強化され、思想的には極左路線が敷かれていた。文化大革命について詳述するつもりはないが、その極左路線がいかに極端であったのか、その例を一つだけ挙げておくこと

にする。

今ではあまりにも馬鹿らしくて、笑い話にもならないのだが……。

一九六九年にアメリカがアポロ一一号で月に人間を送り込み、アームストロング船長が月面に降り立った。そのとき「一人の人間にとつては小さな一歩だが、人類にとつては大きな飛躍」と語った言葉はその後、全世界に広まり有名となった。当時、世界の五分の一の人びとがテレビ中継で、月面着陸の瞬間を見たと言われている。

ところが、文化大革命のまった中であつた中国共産党毛沢東指導部は、この事実をいっさい国民に知らせなかつた。理由は、やや乱暴な説明になるが、ブルジョワ反動国家アメリカのおこなっていることを知るのには、毒にはなつても益にはならないといふものだったのである。

当時の中国は、個人所有財産を認めない経済政策のため、人びとの労働意欲は減退し、経済活動がすっかり沈滞していた。それにもかかわらず政府が公表する農業や工業の生産高は右肩上がりだった。のちになつてわかつたことだが、そのほとんどの数字は粉飾されていたのである。

「大鍋飯」(ダグオファン)という言葉は、当時の中国人たちの考え方や意識を象徴的に示していた。

「鍋」は日本では釜になるだろうか。この言葉をそのまま解釈すれば、大きな釜の飯である。現在の中華人民共和国は、現実がどうであるかは別にして、社会主義を標榜している。しかし、一九七八年に始まった改革開放路線以前は、正真正銘の社会主義国家だった。言い換えれば、「完全雇用」で「失業者ゼロ」だったのである。現在、厳しい雇用状況に追い込まれている少なからぬ日本人はこの文字を見ただけで、垂涎状態になるのでは……。失業者を一人も出さないのだから、それだけですばらしいと言えるのかもしれない。

「文化大革命」から「改革開放」へ

ところがここに大きな落とし穴が待っていた。私たち人間というものが、異常なほどに自己愛が強く、欲望をもつ動物にはかならなかつたからである。徹底した平均主義、平等主義は一所懸命働こうと、そうでなかりうと、同一賃金、同一待遇が原則である。そんな

ると真面目に仕事をする方がアホらしいという思いが頭をもたげるのは、むしろ当然だったかもしれない。

真面目も不真面目も同じこと

幹多幹少一個様

きちんともいい加減も同じこと

幹好幹壞一個様

ちなみにインターネットの『チャイナネット』の資料では、一九七〇年当時、国民一人あたりの年間所得は大ざっぱな数字になるが、およそ二五〇元に過ぎなかった。現在のレート（一元〓約一四円）で換算すると、日本円でわずか三五〇〇円といったところだろうか。

だからこそ、と言つては身も蓋もなくなるけれど、民衆の上に立つお役人さんはその地位を最大限に利用することに腐心するようになる。

役所の入り口 門戸開放です

衙門口 朝南開

理なかりとも金あればどうぞ

有理没理拿銭来

理があつても金なければお断り

有理没銭莫進來

一句目の原文「朝南開」は、直訳すれば「南向きに開いている」である。ただしこの戯れ歌では二句目以下を見ればわかるように、「朝南開」に込められた意味は、「表向きは何もうしろ暗いところはありませぬ、清く正しく、誰にでも門は開いていますよ。でもそこはそれお金がね……」というわけである。

それでは現在の中国はどうか。

二〇〇九年九月に公表された中国統計局のデータによると、二〇〇八年の国民一人あたり総所得（GNI）は二七七〇ドル、日本円にすると二五万六八九〇円で、一九七〇年当時に比べて、とてつもない数字になっている。世界銀行の基準に照らせば、この数字はすでに中所得国家の仲間入りをしている。ちなみに日本は、二〇〇五年度の統計だが、一人あたり国民総所得は約三万八〇〇〇ドルだった。

ところで、いま挙げたような戯れ歌は、残念ながら過去のことではない。社会主義がど

ここに飛んでいってしまった観のある現在の中国でも、依然として生き残っているのである。この点については後述する。

さて、この文化大革命だが、先述のような状況の中で、中国は経済だけでなく、あらゆる領域で世界から取り残されてしまった。この遅れを取り戻し、新たな国家建設を目指すべく、中国共産党は文化大革命収束後の一九七八年一二月に開かれた中国共産党第一期第三回全体会議で、改革開放路線への転換を決定した。

文化大革命中に日中国交正常化（一九七二年九月）や、周恩来首相死去（一九七六年一月）、毛沢東国家主席死去（一九七六年九月）と、中国を代表する指導者が相次いで亡くなっていった。それはあたかも新しい中国の始動を暗示するかのようだった。事実、一九八一年六月になると中国共産党は毛沢東によって発動された文化大革命を全面的に否定するに至ったのである。